

地域づくりシンポジウム（三河会場）

日時:平成 25 年 11 月 21 日 15:00～16:40

場所:名豊ビル コミュニティホール

開会挨拶

〈永田副知事〉

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました愛知県副知事の永田と申します。本日は大変お忙しい中、地域づくりシンポジウムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。日頃は、県政各般にわたりまして、ご理解、ご協力をいただいておりますことを、この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。

さて、愛知県では、今年度、2030年の社会経済を展望しまして、2020年を目標に県政各分野の政策の方向性を明らかにする、新しい地域づくりビジョンを策定しようとしております。

お手元に「新しい地域づくりビジョン骨子」を配布させていただいておりますが、これは、今後の議論のたたき台としていただくために、ビジョン全体の枠組をおおまかに整理したものでございます。

また、ビジョンでは、地域編としまして、尾張、西三河、東三河の3つの地域の方向性を示してまいりたいと考えているところでございます。

今日のシンポジウムは、このビジョンの策定に向けまして、2030年のめざすべき愛知の姿やそれぞれ各地域の方向性がどうあるべきか、そして、その方向性に向かってどう取り組んでいくのかといったことを、県民の皆さんと一緒に議論していきたい、考えていきたいということで、本日の三河地区と明日の尾張地区の県内2ヵ所で企画させていただいているところでございます。

さて、本日のシンポジウムのタイトルは、2030年を展望した愛知の地域づくりでございます。2030年の社会経済をいくつかの視点から考えてみますと、地域づくりに最も大きな影響を与えるものとして、1点目は、やはり人口減少、高齢化の問題でございます。愛知県は、2015年をピークに人口減少社会に突入してまいります。あわせて、高齢化も急速に進んでまいります。そうした人口構造の変化にどう対応していくのかということが各地域共通の大きな課題でございます。

2点目がグローバル化への対応でございます。成長するグローバル市場の中で、その活力を取り込み、稼げる地域にしていくことが重要でございます。一方で、産業構造の変化や雇用の流動化もさらに進んでまいりますので、しっかり地域として対応していく必要があるということでございます。

そして、3点目が、2027年のリニア中央新幹線の開業でございます。開業によりまして、東京と名古屋間が40分で結ばれ、首都圏から名古屋圏に至る5千万人規模の大交流圏が誕生してくるということでございますので、このリニアインパクトをどう活かしていくのか。三河地域で申し上げますと、既存の東海道新幹線の活用、そしてリニアの中間駅でございます、中津川や飯田の駅の利用も考えていかなければならないということでございます。

それから、4点目が、いつ起きてもおかしくない南海トラフの巨大地震や環境エネルギーリスクでございます。こうしたリスクに対応していくため、地域としてしっかり備えていく必要があるということでございます。

こうした4つの視点がある中で、本日のシンポジウムのサブタイトルは、「モノづくりを生かした最強の産業圏に向けて」ということになっております。

ご案内のとおり、この三河地域は、多額の貿易黒字を稼ぎ出すなど、日本の産業発展をリードしてきた地域でございます。西三河は自動車産業を中心とした世界的なモノづくりの拠点でございますし、東三河は製造業だけではなく、全国屈指の農業地帯でもあり、多様な産業が集積している地域ということでございます。

ビジョンの骨子では、めざすべき愛知の視点の一つに、「日本の成長をリードする産業の革新・創造拠点」を掲げさせていただいておりますが、これを支えていく中心的なところが、この三河だと考えているところでございます。

本日は、そうした産業面と経済面を中心に、愛知の発展、また三河地域の発展のために、何をめざし、そして、どういうことに具体的に組み込んでいくべきかということをご議論していただきたいと願っております。

限られた時間ではございますけれども、本日のシンポジウムが有意義なものになることをご祈念申し上げます、私のあいさつとさせていただきます。

本日はどうかよろしくお願いいいたします。ありがとうございました。

パネルディスカッション

テーマ：モノづくりを生かした最強の産業圏に向けて

コーディネーター：戸田 敏行 氏（愛知大学地域政策学部教授）

パネリスト：榊原 雄一郎 氏（関西大学経済学部准教授）

神野 吾郎 氏（東三河懇話会副会長、株式会社サーラコーポレーション代表取締役社長）

天野 櫻子 氏（奥野工業株式会社取締役副社長、奥野機材株式会社代表取締役社長）

藤田 昇義（愛知県知事政策局企画課長）

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

皆さん、こんにちは。今日は、限られた時間ですが、2030年の愛知を考えながら、「モノづくりを生かした最強の産業圏に向けて」というテーマについて考えていきたいと思います。2030年と言いましても、あと15年ちょっとですので、そういう意味ではリアルな課題かなという感じもいたします。パネリストの皆様方と一緒にこの課題を考えていきたいと思います。

進め方としては、大きく2つに分けまして、最初に県のビジョンの骨子ができてきたということで、県の藤田課長に説明をしていただきますが、そのあと1巡目は、この三河地域のおかれている現状や課題、あるいは、めざすべき将来の姿につきまして、パネリストの皆さんからご意見をいただきます。

2巡目は、具体的に何をやっていけばいいかということで、政策の提案や、県に対する期待などをご発言いただきたいと思います。

それでは、最初に、愛知県の藤田企画課長から新しい地域づくりビジョンについて、ご説明をいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

〈藤田企画課長〉

私の方から、お手元にあります、「新しい地域づくりビジョン骨子」というA3のペーパーに基づきまして、ご説明をしたいと思います。

新しい地域づくりビジョンの趣旨・目標年次でございますが、一番上の四角の中にもございますように、また冒頭の副知事の話にもありましたように、2030年を展望して2020年までに何をすればよいのかを示していきたいということでございます。

最初のページは、全体の目次になっています。左側に2030年の社会がどうなっていくのか、それを受けて、めざすべき愛知はどうなるのか、そして、そのために今どうすべきなのかという形で整理してございます。

2030年の社会経済の展望でございますが、大きく4点です。1つ目が、超高齢社会・人口減少の進行。2つ目が、アジアが世界経済を牽引していこうということと、グローバル化がさらに進むだろうということ。3つ目が、災害リスクの増大と環境・エネルギーリスク。最後に、2027年のリニア中央新幹線のインパクトは、この地域にとって、いい面もあるが脅威もあるということになってくると思います。

そういうことを踏まえまして、愛知として、めざすべき方向として、真ん中に3点示してございます。この考え方については、今後さらに議論を進めていきたいと思っておりますが、本日のテーマに関連した部分について、少しだけ説明したいと思います。

最初に、「リニアを生かし、世界の中で存在感を発揮する中京大都市圏」としております。リニアが来ますと、おそらく首都圏から名古屋圏まで、5千万人規模の大き

な交流圏ができてまいります。そして、その5千万人の大交流圏の西側の玄関口になってきます。大阪まで開通するまでに18年ほどかかるということですので、その間のチャンスをいかに活かしていくのかが1つの視点です。もう1つは、リニア大都市圏の中で、北陸圏や関西圏に対しての玄関口になってくるので、そうしたことを活かしながら、世界の中で存在感を発揮できるような、人・モノ・カネ・情報と呼び込めるような大都市圏をつくっていききたいというのがコンセプトでございます。

それから、その下が「日本の成長をリードする産業の革新・創造拠点」でございます。1つは、「日本の成長をリードする」ということで、この地域は、モノづくりを中心として、日本経済を引っ張ってきたので、その部分は引き続きやっていくということでございます。もう1つは、「産業の革新・創造拠点」ということで、新しい産業を生み出していかなければ、引き続きは発展できないということが「革新・創造」という言葉に込められた意味でございます。

県民生活の面では、「安心安全で、誰もが夢と希望を抱き、活躍する社会」という形で整理してございます。この部分につきましては、右側に重要政策課題と主な政策の方向性を12本掲げてございますが、このうち、「⑥教育・人づくり」、「⑦女性の活躍」、「⑧子ども・子育て応援」、「⑨健康長寿」、「⑩障害者支援」という形で、子育てから高齢者まで、また障害者も含め、誰もが希望を抱き、活躍できる社会づくりをしていくべきだとしております。

そして、1番から12番までの重要政策課題につきまして、次の2ページから具体的に、問題意識と主な政策の方向性を記載してございます。

まず、2ページの「①中京大都市圏」でございます。網掛けの部分が課題認識、その下が主な政策の方向性という形で整理してございます。先ほど申し上げましたように、大都市圏の西の拠点として発展していくために、主な政策の方向性といたしまして、リニア開業の効果的な波及のための交通インフラ整備、国際広域交通基盤の整備、具体的には、中部国際空港の機能強化。そして、名古屋等の高次都市拠点の整備ということを取り上げていきたいと思っております。

「②グローバル展開」につきましては、今後さらに拡大するグローバル市場の中で、活力を取り込んでいこう、稼げる地域をめざしていこうということございまして、県内企業には、どんどん海外に出て行って稼いでいただきたい。それから、2つ目の◆にありますように、海外からもこの地域に投資していただきたい。また、4つ目の◆にありますように、人材面でも、この地域の人材がグローバルに活躍していただきたい。そして、5つ目の◆にありますように、海外からの人材も、この地域で活躍していただく。そういった戦略が必要ではないかと思っております。

3ページの「③産業革新・創造」でございます。本日のテーマに関わりがありますが、本県のモノづくり産業の競争力をさらに強化していくことが必要でございます。

切り口といたしましては、主な政策の方向性にもございますが、モノづくりの持つ付加価値をさらに高めていくための研究開発や、あるいはソフト面を重視したモノづくりの高付加価値化、そして産業構造で申し上げますと、自動車産業に続き航空宇宙産業をさらに振興していくということ。それから、環境・エネルギー、健康長寿など、課題解決産業を育成していくということ。その下に、企業立地環境の整備、創業・起業環境の整備、それから中小企業等の振興についても取り上げていきたいと思っております。

「④農林水産業」でございますが、この地域も農業の盛んな地域でございますが、産業として自立した農林水産業にしていくことが大切であると思っております。そのために、主な政策の方向性といたしまして、農林水産業の市場拡大・経営革新と書いてございますが、要は稼げる農業にしていくことが必要でありますので、そのために、6次産業化など、稼ぐ力を強くしていく取組が必要でございます。

4ページの「⑤文化・スポーツ・魅力発信」でございます。今回は外から来た人に対するイメージを上げていくという観点に着目して書いてございます。主な政策の方向性といたしましては、現代芸術と2つのスポーツ大会を大きな切り口として、他地域からの注目度を上げていきたい。加えて、地域魅力を磨き上げて、観光客を誘致するという形で、産業観光・武将観光をはじめ、様々な魅力を上げていきたいということを書いているところでございます。

次の「⑥教育・人づくり」からは、先ほど少し申し上げたことでございまして、また本日のテーマからは少し離れますので、飛ばさせていただきます。

7ページにまいりまして、「⑩安全・安心」でございます。これにつきましては、南海トラフの巨大地震への備えが喫緊の課題となっております。ハード面の取組とソフト面の取組をしっかりと組み合わせてやっていくことが必要でございます。その下の交通事故と犯罪につきましては、これから高齢化が進む中で、高齢者への対応が大切になるという切り口で書かせていただいております。

「⑫環境・持続可能まちづくり」でございます。環境問題と人口減少社会への対応ということございまして、主な政策の方向性といたしましては、今の社会資本をきちんと更新していくこと。それから、環境や人口減少に耐えられるような持続可能なまちづくりをしていくこと。それから、COP10、ESDにつながる流れを踏まえて、「環境首都あいち」にふさわしい取組を位置付けていきたいと思っております。

以上が12の重要政策課題ですが、9ページに尾張地域、10ページに西三河地域、11ページに東三河地域という形で、県全体のビジョンだけでなく、地域ごとのビジョンも示してまいりたいと思っております。

本日の三河地域に関連して、10ページの西三河地域の「めざすべき将来像」としまして、「愛知の成長を牽引する次世代のモノづくりと先進的な環境の取組が調和し

た活力ある地域」と位置付けております。モノづくりの力をさらに伸ばしていくということと、環境と調和する取組をこの中に位置付けていきたいと思っております。具体的には、地域づくりの方向性と主な政策としまして、産業の中枢性の維持・強化、自然との調和、地域の魅力の創造・発信、道路などの基盤整備、災害に強く安心・安全に暮らせる地域づくりを位置付けております。

そして、11 ページの東三河地域につきましては、先ほど副知事の挨拶にもありましたが、東三河県庁のもと、「東三河振興ビジョン」が既に進行しているところですが、それを踏まえながら、『『ほの国』の魅力あふれる地域資源を生かし、豊かさが実感できる暮らしと多様な産業が展開する地域」と位置付けております。具体的には、東三河の魅力の創造・発信、多様な産業の育成・強化、快適な暮らしを支える基盤づくり、災害に強く安心・安全に暮らせる地域づくり、最後に、東三河県庁や地域の各主体が一体となって進める地域力と連携力の強化ということで、県境を越えた三遠南信の連携につきましても位置付けをしていきたいと思っております。

大変雑ばくな説明になりまして、大変恐縮でございますが、私からのご説明は以上でございます。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。新しい地域づくりビジョンの骨子をご説明いただきました。めざすべき愛知の姿である「日本の成長をリードする産業の革新・創造の拠点」、それを受けて、今日は、モノづくりの圏域を考えていくということになるかと思えます。

ここからは、各パネリストの皆さんにご発言いただきたいと思えます。榊原先生から順に、神野さん、天野さんの順番でご発言いただきたいと思えます。

榊原先生は、地域経済がご専門ということで、地域の製造業の集積や動向についてご研究になっておられます。我が国の今後の発展において、この愛知がどういうポジションをとっていくのか。あるいは、三河地域の果たす役割について、モノづくりがベースであることは間違いないのですが、今後の展望などについてご発言をいただきたいと思えます。榊原先生、お願いします。

〈榊原 雄一郎 氏〉

関西大学の榊原です。どうぞよろしく申し上げます。

私からは、経済のグローバル化が進む中で、グローバル化と地域経済との関係がどうなっているのかをお話しさせていただきたいと思えます。

私の専門は地域経済学ですが、経済のグローバル化が進むと、世の中はフラットになり、どの地域に行っても大きな差がないという世界がイメージされていた時代があ

ります。実際、今現在、この地域経済とグローバル経済との関わり合いは、一体どうなのかということなんですが、産業の発展という観点から考えれば、今現在の時代というのは、国の産業の発展というのは特定地域の発展であると考えerる必要があるのではないかと思います。例えば、皆さんもご存知かと思いますが、アメリカでは、今現在、IT産業が経済を引っ張っていますが、アメリカ全土でIT産業が盛んなわけではないですよね。具体的に言えば、シリコンバレーやルート128という場所がアメリカの産業全体を支えています。この意味においては、経済のグローバル化が進めば、国の経済の原動力は、ある特定の地域経済、特にそこの産業の発展であると考えerるることができるのではないかと思います。そのうえで、この愛知県、ひいては三河地域が日本全体に対して持っている意味は、どのようなところにあるのかについて、お話しさせていただきます。

まず、現在のグローバル経済の中で、愛知県、さらに三河地域は、グローバルレベルで競争力を持つ産業クラスターを形成していると考えerるのではないかと思います。特に、これは自動車産業についてさらに顕著だと言えます。その意味というのは、大きく2点挙げられます。

1点は、愛知県の特徴、さらには三河地域の特徴は、生産現場のみではなく研究開発から本社機能、すなわちモノづくりから意思決定を一通り取り揃えているわけですね。そういう意味で、愛知県は産業首都であると言えるのではないかと思います。そして、この流れというのは、愛知県と大阪・東京を比較したときに、より顕著になるのではないかなと思います。三大都市圏の中でも、東京一極集中が進む中で、大阪と名古屋のポジションが徐々に下がってきています。大阪と愛知県は何が違うのかという観点で考えれば、大阪は私が現在住んでいる場所なんで大変残念ですが、生産現場と本社機能を両方とも失いつつあります。すなわち、二重の空洞化が進んでいる。それに対して、愛知県、ひいては三河地方というのは、このモノづくりとくっついた意思決定機能、さらには研究開発機能があって、まさに一通りの機能を揃えている。名古屋では、一部で中枢管理機能の低下がみられますが、このモノづくりと結び付いた意思決定機能、研究開発機能、さらには現場の強さに関しては、日本の中でも群を抜いていると言えるのではないかなと思います。

もう1点、今後の産業の発展を考えると非常に重要な論点といたしましては、特に自動車産業に言える話だと思いますが、産業の方向性や標準、要するにグローバルスタンダードを決めるソフトパワーを備えている地域でもあると言えるのではないのでしょうか。具体的な例といたしましては、トヨタのハイブリッドカーが一番顕著かなと思います。15年ほど前の時点で、ハイブリッドカーがこれだけ普及すると予想した人がどの程度いたのか。自動車産業を研究している人でも、ハイブリッドカーに関しては、かなり懐疑的な見方をしている人が多かったかなと思います。一方で、

トヨタはその技術を育ててきて、今現在、これが世界の環境車のスタンダードのひとつになっているわけですね。今後、ある特定の地域が発達するためには、このような業界の方向、業界の規格、スタンダードを決める企業が地域にあるということが非常に重要になってくるのではないかなと思います。その意味においては、愛知県、特にその中でも三河地方というのは、そのようなソフトパワーを持っている地域だと言えます。そのような意味においては、この地域は、少なくともここ 20 年くらいは世界をリードしてきた地域だと思いますので、今後とも、こういう機能が期待できるということが言えます。このような意味で、愛知県、ひいては三河地方というのは、グローバルレベルで非常に高い競争力を持った産業地域であって、今後とも、日本経済を特に産業面から牽引していくことが期待されるとまとめることができるのではないかなと思います。私からは以上です。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。榊原先生から、グローバル化の中で、このエリアは、産業のクラスターの完結性を持っていること、あるいは世界の水準を決めるソフトパワーを持っているエリアであるという評価を出していただきました。私も関西出身で、関西がちょっと衰えているというのが残念でもありますけれども、近年、その差が明確になっているということが言えると思います。

それでは続いて、神野さんからご発言をいただきたいと思います。神野さんは、東三河を代表する企業の経営者であられることはもちろんですが、全国的にいろいろな活動もされておられますし、東三河懇話会の副会長として、地域をどうつくっていくかということについて、企業人としてさまざまな活動をされておられます。東三河の持つポテンシャル、あるいは愛知・中京圏の中での役割、めざすべき方向性について、ご発言をいただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

〈神野 吾郎 氏〉

はい。神野です。よろしくお願いします。

まず、今、榊原さんからいろいろなお話がございましたし、それから、その前に、県の藤田課長から、ビジョンの説明がございましたけれども、まず1つ、今日のようなシンポジウムで大切だと思うのは、地理の関係というか、パワーも含めてどう捉えるかということです。今日は、愛知県のシンポジウムなので、愛知県の中だけでものを考えているのですが、当然、その東には静岡県があり、その先には東京があり、西には岐阜、三重があり、その向こうに関西圏がある。それから、アジアがあり、北米、ヨーロッパがある。そのような全体図をイメージしないと間違えてしまうかなと思います。どうしても県のビジョンというと、県だけになってしまうのですね。ここ

は、私としては、すごく引かかるものがあるなというのがまず1つあります。

その中で、愛知県を考えると、1つは、名古屋圏、グレーター・ナゴヤをどこまでにするか。西三河がどれだけ入るかというのは、いろいろ意見があるところだと思うのですが、それから、今日皆さんがいらっしゃる豊橋を中心とする東三河。その先には、浜松等の遠州、さらには東京というような流れになるのかなと思います。それで、そういう切り口で見ると、東三河は、産業集積という点でいうと、製造業が3.8兆円ということで、愛知県の中では1割のシェアですね。西三河は20兆円ですので、大変大きな額で、日本のモノづくりの中心ということになるのです。西三河と比較すると、東三河は4兆円ということで少ない量ですが、実は全国規模で言うと、大変な集積になります。さらに、湖西が1.6兆円、浜松が2兆円、それから磐田も1.7兆円、掛川も1.1兆円で、東三河から遠州では、10兆円くらいになってきます。それで、西三河の20兆と、この東三河・遠州の10兆で、30兆というような話になります。これは、まさしく、世界の輸送産業における、大変大きな集積です。愛知県だけで考えると、トヨタさんのグループを中心にものを考えてしまうのですが、東三河になりますと、ホンダの色があったり、スズキの色があったりします。それから、さらに東に行くと、ヤマハ発動機。ヤマハ発動機も、昨日の自動車ショーで四輪をつくるという発表をしていました。非常にメーカーがマルチであるということで、トヨタ、ホンダ、スズキ、ヤマハという世界のブランドがつながってくる。実は、これは縦系列ですけども、例えば、トヨタさんのエンジン部品をヤマハが供給している部分があったりして、いろいろなクロスオーバーがあるのです。それから、日本ではなかなか難しいのですが、海外に行きますと、部品の融通は相当されています。海外では、ホンダ系列の会社がトヨタ系やスズキ系に部品を納めていることが、当然のようにあるのです。ですから、今後はそういうことをどう考えていくかということがすごく大事なかなと思います。

それから、もうひとつが農業です。野菜が東三河で530億円くらいですね。愛知県のだいたい半分、6割くらいがこの東三河で、全国的にも非常に大きな集積地です。それから、花きが500億円くらいです。これは全国の10%を超えるボリュームになっているということです。それから、畜産が400億円を超えるということで、愛知県の中でも50%を占めています。愛知県という単位でみると、野菜、花き、畜産は、50%以上がこの東三河ですね。これは、ただ生産しているというだけではなくて、そこには技術があるのです。ですから農業技術、それから花を栽培する技術、それから畜産の技術が、ここには集積されています。グローバルな話として、実際に東三河の農家の人々がフィリピンに行って、東三河の技術を使って大成功するというようなことが行なわれています。それから、先ほどから話しているエリアの展開でいうと、自治体別では、田原が全国で1位の出荷額で、浜松が4位、豊橋が6位というようなこと

で、全国でもトップクラスの生産地であるということです。

昔、西三河は日本のデンマークと言っていたのですが、トヨタグループを中心とする生産が中心になって、農業の割合が減ってきたかなと思います。いずれにしても、そういう産業の非常に大きな集積とともに、先ほど榊原先生もおっしゃっていたソフトパワー、技術パワーがあるということで、これは全国的にも、世界的にも、非常に重要なことだと言えます。

あと、東三河の役割という話ですけど、まず、愛知県が、全国、そして世界の中でどういう役割を果たしていくのか。中部圏とか道州制とかいろいろありますけど、世界の中の中部圏という役割の中で、愛知県がどういう役割をするのか。それから、その中で東三河がどういう役割をするのか。まずは、そういうグランドデザインをきちっとつくること。それと、地域間のネットワークが非常に重要です。県境や市町村境が、あらゆることでネックになっているわけですね。このネックを克服した時に、大きなメリットが出てくるわけですね。そこのところを 2030 年のビジョンでは、よく議論していただけたらと思います。以上です。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。神野さんからは、世界の中でこの地域を見るときに、越境といいますか、枠を越えて物事を見るといういろいろな力が出てくるのではないかとご指摘がありました。それから、榊原先生からご提示のありました産業クラスターについて、企業面でみていくとどうなっていくかと言うと、この地域はマルチブランドになっているというご発言もいただきました。農業についても、製造業と同じように、技術の展開がみられ、境を越えて集積しているというご指摘をいただいたと思います。

続きまして、天野さんからご発言をいただきたいと思います。天野さんは、刈谷市で自動車の部品などの製造、あるいは販売をされる企業の経営者として活躍をされておられます。自動車産業は、このエリアの核であります。その実態の中で、どのようなことを考えてみえるのかをご発表いただきたいと思います。よろしくお願ひします。

〈天野 櫻子 氏〉

奥野工業、奥野機材をしております、天野と申します。よろしくお願ひします。ちょっと自己紹介的なことを申し上げますと、私は大学を出てから 4 年間、大手自動車部品メーカーに勤めておりました。ちょうどその頃、奥野工業の社長をしておりました私の父が急死いたしました。それ以来、実家であり奥野工業に戻りまして、私と母と弟で、この 3K 職場を切り盛りしておるという状態でございます。

それ以来、日本の自動車産業、日本経済の激動が続いていまして、特にこのリーマンショック以降、私たち中小企業の試練が、顕著に現れてきた時代ではないかなと思っています。

例を挙げますと、まず四半期ごとに、製品のコストダウン要請が来るのです。これが非常にきついものです。大手さんから「今年は何%下げなさい」。一生懸命汗を流してやります。そうすると、次の年、それに対してまた「□%やりなさい」。その積み重ねです。この材料高、電力高で加工費用がどんどん上がる中で、一年一年、コストダウンしていくのは本当に大変なことで、毎年1千万円以上のコストダウンをしていかなければいけません。まさに踊り場のない急な階段を転げ落ちる勢いでございます。中小企業はどこもそういう思いをしながら、大手を支えている状況でございます。

また、それに拍車をかけて、数年前まで大手さんも非常に厳しい状況だったものですから、私ども中小が開発し仕事を受けていたものを、どんどんご自分の資本の入っているグループ企業に仕事を移してしまうことがたくさん続きまして、中小企業はすごい試練の時を迎えております。

さらに、皆さんもご存知かと思えますけども、アジアの安い製品ですね。安い労働力を武器にしたアジアの安い製品と同じ土俵で勝負しないといけない。それにもかかわらず、品質や納期は日本レベルのまま。コストはアジアの製品よりも安くしなさいという難題にどう対処していったらいいか。これは本当に至難の技でございます。この世界中と戦わなくてはならない弱肉強食の厳しい時代の中を、中小企業が生き残るには、もう企業力を上げるしかないのです。あれはだめだ、これが嫌だと文句を言っている、切り捨てられてしまうだけです。

企業力を上げるためには、独自技術を持つこと。うちにしかできない技術を維持・継続し、また育成していく土壌が要ります。この独自技術を持っていることが一番の強みです。

そして二番目には、既成概念にとらわれない開発力です。他の人がやらないこと、あるいはプラスアルファの付加価値を付けた開発力を身につけることが企業力を上げていくことです。

そして、それを推進していくには、社員が一丸となってエネルギーにそれに向かって取り組んでいかないと、なし得ないことです。この自動車産業の広い裾野は、中小企業が元気でないとやっていけないと思います。中小企業が元気でないと、日本のモノづくりは死に絶えてしまいます。本当に部品をつくっているのは中小です。私たちの3K職場をもっともっと皆さんにご理解いただいて、日本のために、将来を担う子どもたちのために、少しでも活路を見いだせるようないろいろな施策を練っていただいて、私たち自身もそれに向かって頑張っていきたいと思っております。以上で

す。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。ご発言の中にもありましたが、生産、モノづくりという
と、全体的に捉えますが、その中で基盤を支えている中小企業の皆さんの集積力が、
この地域の力になっているということでもあります。そして、企業力を上げるためには、
独自技術開発、社員の一体性が重要だと、一言で言うとそうなると思いますが、実は
大変なご苦勞がそこにはあると思います。

ここまで、現状の認識などについて、パネリストの方からご発表いただきました。
ざっと振り返ってみますと、我々はグローバル化の中に完全におかれており、その中
で、産業の力をどう評価できるかということ、榊原先生にご発言いただきました。
神野さんからは、地域としてそれを見た場合にどう捉えていくかという見方をご発言
いただいたと思います。そして、天野さんからは、産業面の基盤をつくっている中小
企業が継続的に活躍をしていくためには、どうすればよいのかという問題提起だった
と思います。

ここからは、将来に向けて、地域がどのようにしていけばいいのか。地域づくりを
担う主体が何をすべきか。行政がどうするのか、民間企業がどうするのか、あるいは、
大学がどうするのか。とりわけ、今日は県のシンポジウムでもありますので、愛知県
にどのような役割を期待するのかということについてご発言をいただきたいと思い
ます。

順番は先ほどと同じように、榊原先生から、神野さん、天野さんという順番でご発
言いただき、それを受けて藤田課長にご発言いただきたいと思います。

それでは榊原先生からお願いします。

〈榊原 雄一郎 氏〉

先ほど、三河地域は、日本の産業の中心であるという話をさせていただきました。
一方で、問題がないわけではなく、例えば、先ほど言ったメリットというのは、地域
のシステムというよりは、その地域にある企業内部のシステムであると思います。こ
れをどのようにオープン化していくのかが、今後の1つの課題であろうと思います。

同じような意味ですが、浜松などを入れれば必ずしも当てはまらない面もあるか
と思いますが、少なくとも三河地方で考えると、既存の産業が強いために新しい産業が
なかなか生まれてこないという問題も挙げられるのではないかと思います。県のビジ
ョンといたしましては、今後、大きな期待があがっている航空機で考えれば、技術的
な高さでは非常に期待がもてますが、量の面から考えれば、どうしても自動車と比べ
た時に比較にはならないであろうと思います。新陳代謝の観点から、こういう産業の

転換が今後どのように行われていくのかが、非常に重要な課題だろうと思います。

ただ、自動車産業全体でいえば、良くも悪くもですが、まだまだ発展途上であると考えています。すなわち、市場も、技術も、拡大する余地がだいぶ残っているわけなんです。このような余地があるうちに、新しい産業がちゃんと発達できるのかどうか、今後の10年、20年先を見据えた時に、非常に重要な課題になってくるのかなと思います。

あともう1点。県の会議でも、さんざん述べさせていただいていることですが、今後、都市のイメージ戦略や住みやすさの向上が非常に重要になってくるだろうと思います。私は、今現在、関西大学に勤めておりますが、18歳まで愛知県で育ちまして、それからずっと外に出てるわけです。例えば、関西の学生が見た愛知県というのは、どう見えるのか。さらには、東京との比較などでどんなイメージを持っているのかという観点で考えれば、県が課題で挙げていましたように、やはり、イメージとしては、必ずしもよくないですね。実際にそうでなくとも、愛知県が保守的だと見られるということも非常に多いわけですよ。実際に仕事をしたことがあるかを問わず、イメージとして言われることが非常に多いということが言えます。そうした中で、愛知県、さらには三河地方が、都市としてのイメージをどのように上げていくのか。今後、住みやすさを考えた時に、選んでもらう地域づくりが非常に重要なのではないかなと思います。

21世紀というのは、人材獲得競争の時代であると言えますが、日本はまだその中に入っていないのが現状かというふうに思います。海外の国では、グローバルレベルで、いかに人材を獲得するのかと。いい人材を獲得するために、いかに自分たちのイメージを高めて、いかに住み良いまちをつくっていくのか。このようなことに、しのぎを削っているわけですね。少子高齢化は待ったなしです。これが工業地域に与える影響というのは非常に大きいと思います。一面では、当然、需要の問題もありますが、生産年齢人口の減少をどのように補っていくのか。さらには、人材という意味でも、グローバルレベルでの獲得競争に勝つためにも、まずは住みやすさを上げていく必要があると思います。その上で、同時に、地域のイメージ戦略をどのようにやっていくのかを考えていく必要があるのではないかなと思います。私が見ている限り、比較的うまくやっているなと思うのは、例えば、福岡市でしょうか。福岡市は、出張でよかった街や、住みやすい街ということで、結構上位にくることがあるかと思いません。数値データで考えれば、必ずしも数値が高いわけではなく、逆に愛知県のほうが高い場合もたくさんありますが、福岡のイメージというのは、選ばれる、いいものをこれまで築いてきているのではないかなと思います。21世紀の中で、今後、日本が、この人材獲得に向けてどのような戦略を展開していくのか。この点に関しては、国との関わり合いもありますので、なかなか難しい面もありますが、まずは、その第

一歩として、愛知県の都市としてのイメージ戦略をどのように進めていくのかを考える必要があると思います。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。榊原先生からは大きく2つ、1つは、企業内のクローズドになりがちなシステムをどう開いていくのかということ。もうひとつは、都市のイメージ戦略、イメージアビリティですね。名古屋あるいは東三河、西三河といった時に何が思い浮かぶのか。そういうことが、これは次の神野さんの持論でもありますが、人材というものに直結してくるというご指摘であったと思います。

それでは、続いて、神野さんからご発言いただきたいと思います。

〈神野 吾郎 氏〉

1回目のお話の中でもありましたように、この地域は我々の思っている以上に、世界の中で非常に恵まれたというか、あらゆる意味での資源を持った場所だということ、まず、きちっと認識する必要があると思います。そして、将来に向けて、このポテンシャルをどう生かしていくことができるかということですね。例えば、アメリカのシリコンバレーは、IT産業で有名ですが、電気自動車のテスラは、シリコンバレーで始めているわけですね。なぜかと言うと、IT技術もちろんあるんですけど、開発する土壌と人材ですよ。そういうことをするためには、東海岸でもデトロイトでもなく、シリコンバレーから始めないといけないということで、テスラの創業者たちはシリコンバレーで始めるわけです。要するに、自動車産業だけでなく、何かやりたいなというような、愛知、そして三河にする。それから、ちょっと聞いた話ですが、シアトルのボーイングの工場に行くと、トヨタの自動車のライン方式を採用して飛行機をつくっているのですね。ですから、飛行機は全然違うイメージが強いのですが、実は車と同じような生産ラインでつくっている。さらに、びっくりしたのは、ルイ・ヴィトン。ルイ・ヴィトンの鞆の生産工場を見に行った人から聞いたのですが、9割方が手作業ですけど、工場の壁に「カイゼン」とでかく書いてあったらしいですね。これをどう生かすかということが、やっぱり大事なかなと思います。ただ、どうしても今まで来た道を、またその延長で引っ張るというところがあって、行き詰っちゃうわけですね。そのときに、違った分野とのハイブリッドな、新しい融合をしないと、次の時代には生きていけないんじゃないかなと思います。

今、この東三河では、経済界で広域経済連合会をつくって、自治体ではどうしても縦割りになりやすいことについて、クロスオーバーにいろいろ議論してやっていこうということで、いくつかのプロジェクトをやっています。モノづくりに関しても、メーカー系列を越えた形の付き合いができる場をつくったりしています。それから、こ

れから非常に大事だと言われる観光についても、ただ単に温泉の足し算ではなくて、工場と温泉、健康と温泉、スポーツと温泉、文化と温泉とか、ジャンルの違うものを、ハイブリッドに足し算をすることによって新しい価値を生むということをやっているようにしています。それから、一番大事なのが人材育成。それぞれの商工会議所で、いろいろな人材育成プログラムがあるのですが、それを全部つなげようとしています。そうすると、東三河は生活圏としては1つなので、どこの商工会議所・商工会の勉強会にも、中小企業の人でも参加できるようにしようではないかと。たぶん、県にもいろいろな人材育成のプログラムがありますから、是非、参加してもらおうといいかなと思います。そういう統合を進めているということです。

それから、私の仕事の関係で、新エネルギーの開発を会社でチャレンジしております。奥三河の木質バイオマス発電を研究すると、奥三河の材だけでは、ボリュームが足りないのです。ただ、補助金やいろいろなシステムが、県単位、自治体単位ですから、そうすると愛知県だけでは、木質バイオマスの発電所は、小ぶりなものではあるかもしれませんが、経済的に一番いいものはなかなかできない。それで、浜松は合併して天竜まで全部浜松になりましたので、全部の山を入れると、奥三河の6倍の量が出るのです。それから、さらに南信は山ばかりですから、いっぱい材があります。この3つを足すと、結構なボリュームが出てくるなと思います。だけど、発電所をどこにするかによって、難しくなってしまうのです。我々ビジネスやる側としても、こういうことをどうクリアしていくかが非常に重要なことで、ぜひ乗り越えていただくと、ビジネスチャンスが増えます。規制緩和という言葉がありますが、規制緩和だけではなくて、構造の問題ですよ。それを越えるといいかなと思います。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。神野さんからはこの地域の評価ですね。評価というのはとても大事なことで、この認識をどう持つかということが1つ。それから、「そろそろ日本型シリコンバレーを」というのは、いろいろなところで、言葉としては出るんですが、どうつくるかですね。新しいものを生み出せるような場所として認知されると、シリコンバレーのようにいろいろな人が、ここに来てやろうとなってくると思います。これをハイブリッドにどう作るかということで、すでに広域経済連合会で枠を越える試みが、人材育成の面、あるいは観光の面で行なわれているということをご紹介いただいたと思います。ただ、実際にやろうと思うと、先ほどのバイオマスのように、境という官側の制度があり、それをどうするのだということがあります。

続きまして、天野さんからもご発言をいただきたいと思いますので、よろしく願いします。

〈天野 櫻子 氏〉

私が県や行政に望むことは、まず中小企業に対する減税です。具体例の一つとしましては、機械や設備の特別償却が一番大きいのではないかなと思います。今、機械設備の特別償却は30%となっています。なんとしてもこれを50%まで引き上げてください。私たちは常に技術向上を目指しています。そのためには、新しい設備を導入することが不可欠です。どんどん進歩している新技術を取り入れたモノづくりで競争力を付けないと勝負できません。そして、これから始まっていく少子高齢化に向けて、省力という意味でも新しい設備導入は不可欠ですし、安全という意味でも新しい設備の導入が必要ですので、特別償却50%を考えていただきたいと思っております。

次に、人材の確保です。今の若者は、どんどん大企業志向になっていまして、なかなか中小企業に就職したいと思う方が減ってきております。権利ばかりを主張する傾向にある方も多いですが、もっと中小企業で働くことの面白さ、意義、そしてやっぱり愛知県はモノづくりの県ですので、この愛知のモノづくりの価値を見い出して尽力していただける若い力をどう育てていくかということがすごく大切なことだと思っております。若い人が、自分で考える力、自分で動く力をもっと身につけて、世界を見渡せる大きな見識を持ってほしいと思います。今、私も弊社の採用にも関わっておりますが、海外に行きたいかという、「いや、僕は海外はいいです。」という方がほとんどです。本当に日本人、小さくなってしまいました。非常に悲しいことだと思います。どんどん世界を見渡せる見識を付けていただいて、語学力を持ったタフな人間になってほしいと思っております。そのための支援を行政や大学がもっと必死になって取り組んでいただきたいと思っております。

そして、グローバル化につきましては、私たちも1995年からアメリカと中国のほうに出ていますが、日本で商売ができるなら、日本で商売したいです。大変なところに出て行きたくないです。海外に工場を展開する際には、その土地で骨を埋める気度やってくれる人がいないとうまくいきません。大企業では優秀な人材がたくさんいます。先発、中継ぎ、リリーフで、どんどんいい方を出せます。しかし、中小企業では、先発のエース一人しか出せません。私たちはそれほど優秀な人材をたくさんは抱えておりませんし、日本のマザーカンパニーを運営していくのもぎりぎりです。そういった意味でも、グローバル化を推し進めていく大企業と、それについていく中小企業のギャップをどう埋めていくかも大きな課題だと思っております。

しかし、私たちは、いつも負けないぞという気持ちでアベノミクスの矢の効果を期待しながら、日々一生懸命頑張っていくしかないなど。進化していくしかないなど。古いことにこだわってはいけません。新しいことにどんどん挑戦して、力を尽くしていく、これが、私たちに課せられた今の課題だと思っております。以上です。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。天野さんからは、冒頭に非常に明快な要望がありました。それから、人材ですね。このことについては、私や榊原先生も含め、大学の責任は大きいと思います。やっぱり、多くの学生がモノづくりに関係するところに就職していくのですが、確かに教育できてないということですね。そういう意味で、先ほど神野さんからご発言ありましたが、企業と協働した教育の在り方がとても重要だと思います。また、大企業と中小企業のギャップをどう埋めるかについてもご発言をいただきました。

いくつか課題が出ましたが、藤田課長からご発言をお願いします。

〈藤田企画課長〉

たくさん宿題をいただきましてありがとうございます。まず、先ほど榊原先生から、企業システムの中に、この地域のソフトパワーが組み込まれており、地域のシステムになっていないのではないかという発言がございました。そういった部分があるかと思いますが、自動車産業自体がいろいろな事業者のピラミッドになっていまして、そのピラミッド間をつないでいることも、この地域の強さだと思っています。私どもとしては、この地域のオンリーワン技術を持った企業が、さらにグローバルな展開をしていくことで稼いでいくことと、もう1つは、そういう自動車産業の中のオンリーワン技術を持った企業が異業種に出て行き、産業の幅を広げながら新しい産業につなげていくことが大切なのかなと思ってございます。神野社長さんからも、いろいろな分野を融合していく必要があるというお話がございましたけども、そういう横に出て行くというか、挑戦する力を行政が後押しをする。具体的には、医療分野やエネルギー分野などに出て行くところを後押ししていくことが大切なのかなと思ってございます。

それから、それに関連して、当然、中小企業が非常に大切な役割を担っているということでございます。ただし、減税については、私どもも、そういう問題意識は強く持ってございまして、国に対する税制改正要望でも、要望はさせていただいておりますが、引き続きの努力かと思ってございます。

あと、人材の確保に関しては、今回のビジョンの中で、相当強く意識していく必要があると思ってございます。実は、このビジョンをつくる際、若者が就職できない、あるいは就職してもすぐに辞めてしまうというというリーマンショック以降の状況の中、なんとか若者に定着してもらうようにという観点で問題提起を始めたのですが、有識者懇談会では、それよりも教育、人づくりが劣化してきているのではないか、社会の中で仕事をやっていくための挑戦力が落ちているのではないかという議論を持ってございます。前向きに挑戦していく力を養っていく必要があるのではないかと

ってございます。あわせて、中小企業とのマッチングという形で、会社のネームブランドばかりではなくて、その会社の発展の可能性を見極めて就職していくような取組にも力を入れていく必要があるのかなと思います。以上、雑ばくな発言でした。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。3人のパネリストの方のご発言に対して、藤田さんからコメントをしていただきました。

モノづくりのエリアとしてのこの地域の評価、それからモノづくりの力をどう展開させていくのかという技術の問題、あるいはその中小企業の問題。それから、都市のイメージアビリティということもありました。また、住みやすさということもありました。これをどう地域として戦略化していくのか。そして、最終的には、人をどうつくっていくかが非常に大きなポイントになるのではないかという感じがいたしました。

ここまで、「モノづくりを生かした最強の産業圏」に向けた課題、あるいは、これから行くべき方向について、ご発言をいただきました。

若干時間がありますので、もう少し幅広に、2030年の愛知の発展に向けて、ご発言いただければと思います。また同じ順番で、榊原さん、神野さん、天野さんでご発言をお願いします。

〈榊原 雄一郎 氏〉

私が冒頭に、愛知県、さらには三河地域は産業首都であるという言い方をしたかと思いますが、もう一言それに言葉を付け加えるとすれば、特定産業首都、ある特定の産業の中心だと言えるのではないかと思います。現状としては、特定産業首都で結構かなと思うんですが、長い目を見たときに、産業の新陳代謝を考えていくと、やはり特定の産業だけではだめだろうということで、どんどん新しい産業が育っていく必要があると考えています。その意味では、先ほどの神野社長の話に非常に同意しております。例えば、地域が新しい産業を生み出す力を持つためには、ある特定の産業だけではなく、あの地域に行けば何かがあるとか、事業を興す時にはこの地域に行こうというような土壌を地域全体で持つ必要があります。その中で、結果としてある産業が生き残り、それが中心の産業になっていく。このような繰返しが、非常に長い歴史の中での特定の産業の発展、さらにはその地域経済の発展になってくるかと思っています。非常にぼんやりした話で申し訳ないのですが、1つの産業だけではなく、地域全体のシステム、土壌として、あの場所に行ったら何かあるのではないかと思えるような地域づくりを進めていく必要があるのではないかと思います。

あともう1点。先ほど、愛知県は保守的に見られるという話をしましたが、逆説的

な話をすれば、保守的だと言われている愛知県や京都では、地元の企業が比較的踏ん張っています。大阪では、生産現場も本社機能もどんどん大阪から離れていっています。それなので、一概に保守的なイメージが悪いわけでもありませんし、その堅実なビジネスのやり方も重要になるかと思いますので、こういう良さを残しながらも、将来、愛知県が特定の産業だけではなく、仕事がしやすい場所、さらに言えば、人が住みやすい場所になるための努力をする必要があるのではないかと思います。以上です。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。それでは続いて、神野さん、お願いします。

〈神野 吾郎 氏〉

一番大事なのは、推進する力だと思います。愛知県のポテンシャルティや、将来何をやっていったらいいということは、皆が分かっているわけです。問題は、それをどう推進するかということだと思います。世の中は、グローバル化や高齢化社会など、いろいろ変わってきているわけです。ただ、県という単位は、明治時代以降、ずっと微動だに変わっていません。それから、県境の問題だけじゃなくて、行政の中の組織だったり、いろいろな関係もあると思うのですが。もちろん、県境を越えた統合的な組織や、いろいろなプロジェクトがあるのですが、なかなか機能しているように思えないですね。それはどこに問題があるのかということです。例えば、企業であれば、当然成績の上まらない会社は倒産したり、統合されたりが起きるわけですし、そういうことがないように、合併したり、企業統合したりというようなことが起こるわけです。この20年でも、都市銀行が4つになってしまうとか、新日本製鐵と住友金属工業が一緒になるとか、我々の前の常識では無いような企業統合がいくらかもあるわけです。

ガバナンスでいうと、政治です。愛知県では、知事が選挙で一人だけ選ばれる。それから、議会には、県会議員さんたちがいます。政治家が、愛知県と三重県と岐阜県を統合すると言っても、向こうにも知事がいたりして、うまくいかなかったりするわけですね。ですから、これもハイブリッドにやっていかないといけない。本当の目的は、皆が成長して、豊かに幸せに暮らせるような国をつくりたいということなので、そのために、県の事務方同士がそういうこと考えてもいいわけですし、どこからどう始まってもいいと思うのです。そろそろそういう時代ではないかなと思います。大きな話じゃなくて、小さなところからでも結構です。せつかく2030年を考えるのなら、是非、国、県、市町村を越えて、本当の意味で人が生き、仕事をし、豊かに暮らせる、それぞれの地域をつくれるような枠組みまで考えていただけたらと思います。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

はい、ありがとうございます。東三河県庁は、枠を越えることを始めていますので、期待をしたいと思います。

それでは、天野さん、最後をお願いします。

〈天野 櫻子 氏〉

2030 年に向けて何をすべきか。私たちは進化し続けることしかありません。企業が元気でないと、人もまちも活気が出ません。私たちが業種を転換することは、大変難しいことですが、今よりも技術のレベルを向上させること、そして自分の業界の中で新分野を手がけたりとか、あるいはコンプリート化させたり、あるいは他メーカーとコラボしたりして、時流に合わせたモノづくり、ひいてはまちづくりを目指していけると思います。

また、車業界に携わる者として言いますと、2030 年のモータリゼーションが、HV が主流になっているのか、電気自動車主流になっているのか、いろいろな難しいエネルギー問題がありますので、どうなっているか本当に興味深い時代だなというのが私の考えです。そしてまた、その 2030 年に、私も企業も、いろいろな意味で元気でいられたらいいなと思っております。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

はい、ありがとうございます。1 回目、2 回目、そして最後に補足をしていただきました。このあと、会場から少しご意見をいただきたいと思います。

パネリストの方の発言をまとめることは難しいのですが、私の意識に残ったこととして、1 点目は地域への認識だと思います。この地域にはグローバルレベルの大変な集積があるというご発言がありましたが、これをどう思うかによって随分変わってくるのです。それから、特定産業首都という言葉もありました。そういう蓄積の中で、将来展開をしていくエリアであるという認識ですね。

2 点目は、地域としての総合力をどう出すのかという感じを非常に強く持ちました。日本のシリコンバレーたるために、どうやっていくのかということです。地域や官民の枠を越えていくことや、イメージビリティについて、ご指摘いただいたと思います。

3 点目に、その根幹をつくっていくのは中小企業であり、その企業がどう継続できるか。そして、人材という非常にミクロですけれども、そこがやっぱりきちっと動かないと、将来へ展開していくことはできないのではないかと思います。今後、そういう視点を、このビジョンの中に反映していかれると、今日のテーマである「モノづくりを生かした最強の産業圏」につながっていくのではないかと思います。

た。

それでは次に、会場の皆様との意見交換に移りたいと思います。

会場との意見交換

〈質問者〉

神野社長さんに伺いたいと思います。先ほど、新エネルギーの開発というお話がございました。2015年にトヨタ自動車が燃料電池車を市販されます。愛知県でもガステーションなどのインフラを整備するとのお話を聞いております。今後の燃料電池産業の可能性について、お伺いしたいと思います。

〈質問者〉

今の質問にも関連しますが、神野さん、榊原さんにご質問したいと思います。燃料電池車の燃料となる水素の可能性について、また、東三河地域がどのように貢献できるかということをお教えいただければと思います。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

それでは、神野さん、榊原さん、よろしく申し上げます。

〈神野 吾郎 氏〉

ご質問ありがとうございます。専門家でもないですが、私見で発言させていただきます。新エネルギーは、やっていかなければならない分野だと思います。ただ、新エネルギーで、いわゆる経済的に成り立つのは、かなり先の話か、あるいは原油が300ドルとかになったときに、相対的な意味で採算が合うということになると思います。また、インフラとしても、すごく時間がかかると思います。ただ、未来のために、一定量をやっていかなければならないと思います。これは、国家レベルの話ですね。それで、日本が新エネルギーの割合を10%にするのか、20%にするのかというのは、コストとの裏腹ですね。ですから、ビジョンとして、10%にすると言ったら、国民全体でこれくらいのコストを負担するんだという話で、いわゆる経済性ということについては、しばらくは成り立たないと思っています。ですから、先ほどのバイオマスの話も、新エネルギー政策の中でのビジネスになります。ただ、やっていく必要はありますし、それは国民的コンセンサスだと思います。

それから、水素については、さらにそういうことが言えると思います。ただ、技術のイノベーションと関連しますので、私には分からないこともあります。劇的なイノ

バージョンが起きれば、一挙にブレークスルーすることがあります。10年後にどうなっているかは、今の技術で言えば、こうなると言えますが、それは変わるかもしれません。例えば、ハイブリッド車でも、個人的には、こんなに早く世の中に浸透するとは思わなかったですね。今、電気自動車が出てきていますが、自分が思っていたよりも早いですね。それでも、車全体の10%が電気自動車になるのは、今のスピードでいくと、まだ10年かもっと先だと思います。

〈榊原 雄一郎 氏〉

私からは、水素に関して詳しい話はできませんので、新しい自動車生まれることによって、自動車産業がどのように変わっていくのか、そして、それが地域経済にどういう影響を与えるのかという話をしたいと思います。

まず、内燃機関からモーターを中心とした新しい自動車に変わること、まず、集積自体、つまりそれに関わる企業数は減ってくるのではないかと思います。パーツ自体の数が少なくなり、これまで必要であったパーツがなくなったりしますので、集積の広がり自体は、かなり絞り込まれていくのではないかと思います。

一方で、電気自動車になることによって、ゲームチェンジが起こるのではないかと、例えば、自動車メーカーではないところからベンチャーが出てきたり、発展途上国のキャッチアップが非常に急になるのではないかとされていますが、このことについては、半ばイエス、半ばノーと考えています。現在、電気自動車で比較的うまくいっているのは、テスラモーターズだけで、他のベンチャーは、かなり苦戦をしています。なぜそれが難しいのかというと、ブレーキ制御を考えてみると、プリウスのブレーキが滑る感じがあるということでリコールになったことがありました。その件を思い出していただきたいのですが、車がモーターに変わったとしても、自動車としてのフィーリングを出すためには、非常に高い技術力が必要であることは間違いないのです。さらに、今現在の状況で言えば、モーターは、単なる発電だけではなく、車体制御も行っています。例えば、車が滑らないとかの安全関係や、乗り心地を、モーターを使いながらうまく制御しています。こういうことを既にトヨタは始めています。このような観点から考えれば、今後、集積自体は目減りしていく可能性が高いだろうと考えていますが、一朝一夕にトヨタ、スズキ、ホンダなどの既存メーカーがもっている有利性がなくなるという話は、言い過ぎではないかと思います。そういう中で、時間をかけながら、集積地帯の裾野が狭くなっていくというイメージを私自身は描いております。

〈戸田 敏行 氏 (コーディネーター)〉

詳細に産業面まで言及していただいて、ありがとうございます。

天野さんはいかがですか。

〈天野 櫻子 氏〉

私も、皆さんがおっしゃるように、どうなっていくのかなということをなかなか自分の考えとして、まとめられない状況です。HVや電気自動車が出てきて、神野さんがおっしゃったように自分の考えよりも早いスピードで浸透してきている状況です。それを踏まえると、本当に2030年、この先どうなっていくのだろうと、企業としては不安ですね。淘汰される方の企業に入ってしまった場合は、生き残れないわけですし、そこで生き残っていくためには、新しい業態、新しいシステムに変わっていかなければいけないということで、興味津々、プラス ドキドキ、すごく難しい状況ですが、地域の力を結集して、乗り越えていきたいと思っています。

〈戸田 敏行 氏（コーディネーター）〉

ありがとうございました。そこを地域の力で乗り切っていくと、モノづくりの最強圏になるのではないかと思います。

閉会挨拶

〈永田副知事〉

本日は、大勢の方々にシンポジウムにご参加いただき、ありがとうございました。そして、貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

また、コーディネーターを務めていただきました戸田先生、そして、パネリストの皆様、本当にありがとうございました。

いただいた貴重なご意見、ご提案につきましては、今後のビジョンづくりに反映させてまいりたいと考えております。

私事を申しますと、私は東三河県庁で、東三河のことばかりを考えているのですが、今日、いろいろなご意見をお聞きして、行政界を越え、そして、もっとグローバルに考える必要があるということを感じた次第であります。そのようなご意見も取り入れて、この愛知、そして三河が、モノづくりの中心を支えていくという意識のもと、これからはしっかりと頑張っていきたいと思っています。

本日は誠にありがとうございました。